

[北海道開拓期のマサチューセッツ人脈について]

今日は、北海道の近代化について、明治政府が1869年(明治2年)に設置した「開拓使」によってどのように進められたのか、そしてその中で、いかに優れたアメリカ人指導者が多かったかということをお話したいと思います。この歴史を勉強することは、「北海道とマサチューセッツ州との姉妹提携25周年」の意義を再確認することになると考えています。

さて、歴史の経緯というのは、きわめて複雑な要素が絡み合っていますが、今日は短い時間ですのでなるべく簡単に整理して進めたいと思います。

まえがき

まず、日本とアメリカとの往来・交流はどのようにして始まったのかということを考えてみます。

- 江戸時代末期に、現在の鳥羽から江戸へ向かった輸送船が、静岡県沖で暴風雨に遇い難破して、14ヶ月漂流の末、1834年(天保5年)3月にアメリカ西海岸ワシントン州フラッタリ岬に漂着しています。生存者は乗組員14名中、音吉14歳・久吉15歳・岩吉28歳の三人(三吉)だけでした。この三吉がアメリカに上陸した最初の日本人といわれています。

幸いにも現地の貿易会社・ハドソン湾会社の責任者マクラフリンに助けられて1年余り英語教育などを受けています。この3人の若者は、頭がよく勉強熱心で礼儀正しいという評判が広まっていました。(このあとでお話するラナルド・マクドナルドも、子供の時に、この評判を聞いて日本への関心を強くしています。)

その後、マクラフリンは、日米の交易交渉を求めて、この3人を日本へ送り返そうとしますが、幕府軍の砲撃を受けて鎖国日本への帰還は果たせませんでした。その後、この3人は、長年マカオに住んでいます。そして音吉は、1854年(安政元年)日英和親条約締結の通訳者などとして貢献しています。

- そしてこの三吉の7年後の1841年(天保12年)、土佐の漁師、万次郎が漁に出て遭難して、仲間とともに無人島に漂着、約150日後に、アメリカの捕鯨船ジョン・ハウランド号に助けられます。ホイットフィールド船長は、万次郎を可愛がり、船名にちなんで「ジョン・マン」という愛称をつけて、マサチューセッツ州フェアヘブンに連れて帰ります。この時万次郎14歳でした。このジョン・万次郎がアメリカ本土へ渡った最初の日本人といわれます。

その後、ジョン万次郎はホイットフィールド船長の養子となり、きちんと学校教育を受けます。万次郎は首席になるほど熱心に勉強したそうです。

1851年(嘉永4年)、渡米後10年にして、日本に帰りますが、なかなか鎖国日本には入国出来ません。いろいろ尋問を受けて、1年半後にやっと土佐へ帰国しています。その後、万次郎は幕府に招かれて、1853年(嘉永6年)ペリー「黒船来航」の時の翻訳・通訳や造船指揮などに精力的に活躍しています。また、1860年(万延元年)幕府が派遣した「咸臨丸」で勝海舟や福沢諭吉などに随行して海外使節団の通訳として渡米しています。

- さて、先ほどのアメリカ西海岸ワシントン州のハドソン湾会社に勤める父のもとで育ったラナルド・マクドナルドは、子供の時に、漂流者としてたどり着いた3人の日本人の若者が、頭がよく勉強熱心で礼儀正しいという評判を聞いて日本への関心を強くしていました。

このマクドナルドが成長していろいろな経験の後、船乗りとして、米国捕鯨船プリマス号に乗り日本近海へやってきます。そしてあこがれの日本密入国を目指して、ボート(リトル・プリマス号)に書物類・食料・衣類などを積み込んで、1848年(嘉永元年)6月27日 無人の焼尻島に上陸します。この時、マクドナルド24歳でした。

その後7月2日利尻島上陸して捕えられます。しかし、アイヌや番人の人びとからとても丁寧な扱いを受けたといわれます。その後、松前藩に送られて、さらに長崎送りとなり、9月16日に長崎に着いています。座敷牢に収容されますが、マクドナルドの誠実な人柄や教養の深さなどが信頼されて、14名のオランダ通詞に、約7ヵ月間英語を教えることとなります。

このころの国際情勢として、日本近海に多くのアメリカの捕鯨船や軍艦が来ており、英語通詞の養成が急務とされていました。こうしてマクドナルドは、日本最初のアメリカ人英語教師となりました。

この14名の中で最も優秀であった、森山栄之助は、1853年(嘉永6年)、ペリー「黒船来航」時の幕府の大通詞として活躍しています。他の通詞たちも、幕末から明治初期にかけて、日本の開国にむけての貴重な存在として活躍することになります。

マクドナルドは、その後密入国者として、長崎から退去させられ、帰国しますが、後年、長崎の監禁生活中の「日本最初の英語教師」の体験を誇りと満足をもって、終生忘れられない思い出として振り返っています。

- それから、新島 襄は、幕府の築地軍艦教授所で教えていたジョン万次郎から直接、アメリカの数学・航海術を学び、アメリカの進んだ学問や技術を貪欲に吸収して、強い影響をうけていました。

いよいよアメリカ合衆国への渡航を決意して、1864年(元治元年)6月14日函館港から、米国船ベルリン号で密出国、上海でワイルド・ローヴァー号に乗り換えて渡米します。翌1865年(慶応元年)ボストンに到着しています。この時、新島22歳でした。

ワイルド・ローヴァー号船主夫妻の援助を受けて、フィリップス・アカデミーに入学し、教会で洗礼も受けています。その後、アマースト大学に学び、後に札幌農学校初代教頭となるウィリアム・S・クラークの授業を受けています。新島は、クラークにとって最初の日本人学生であり、クラーク来日の機縁ともなったといわれます。

新島は、密出国者として渡米しましたが、初代駐米公使の森有礼によって、後に正式な留学生として認可されます。1872年(明治5年)には、岩倉使節団の通訳として、約1年間アメリカ・ヨーロッパの各国を訪問しています。1874年(明治7年)アンドーヴァー神学校を卒業、翌年には、宣教師試験にも合格して、日本伝道と日本のキリスト教主義大学の設置を訴え、5,000ドル寄付金を得て、1875年(明治8年)11月、約10年ぶりに帰国します。同月、かねて親交のあった京都の公家華族屋敷の半分を借り受けて、「同志社英学校」を開校します。

1877年(明治10年)には「同志社女学校」を設立。そして、1889年(明治22年)末、同志社大学設立運動中、心臓疾患で倒れ、翌年1月死去しています。46歳の生涯でした。

1、幕末から明治維新へー日本の近代化への原動力となった人たち

鎖国日本の中でも、長州藩(山口県)と薩摩藩(鹿児島県)は早くから、世界に目を開いていました。

- ◆ 長州藩は、「チョーシューファイブ」といわれた青年 5 名を藩黙認で密出国させています。
→1863 年(文久 3 年)5 月、長崎のグラバー商会の手引きで、イギリスのロンドン大学に留学させています。有名な人としては、

井上馨 →(薩英戦争勃発により翌年帰国)後の大蔵大臣。

伊藤博文 →(薩英戦争勃発により翌年帰国)初代内閣総理大臣。憲法草案起草。など

- ◆ 薩摩藩は、1865 年(慶応元年)3 月、4 名の使節団と 15 名のロンドン大学留学生を英国に派遣しています。

これは、3 年前の 1862 年(文久 2 年)8 月、生麦村(現横浜市)で薩摩藩一行の行列がイギリス商人 4 名を切りつけた「生麦事件」に対して、英国艦船 7 隻が薩摩藩にたいして激しい砲撃をしたのですが、その威力に薩摩藩は圧倒され驚いたのです。それで、「サツマスチューデント」の派遣となったのです。有名な人としては、

森 有礼 →初代の駐米公使(少弁務使)。そして初代文部大臣。

村橋久成 →戊辰戦争の砲隊長、函館戦争の官軍軍監として榎本武揚へ降伏勧告。

東京官園・七重開墾場業担当。その後開拓使へ(1874・明 7 年)琴似屯田兵屋 208 戸建設。1876・明 9 年中川清兵衛技師とサッポロビール創設。)

- ◆ 薩摩藩は、1869 年(明治 2 年)8 月、5 名の第 2 回留学生をイギリスに派遣していますが、その一人湯地定基(24 歳)は、翌年 9 月藩命により、アメリカに渡り、マサチューセッツ農科大学へ留学、クラーク博士に農政学を学び薫陶を受けています。

湯地は 1871 年(明治 4 年)12 月帰国後、同じ薩摩藩出身の黒田清隆に招かれて開拓使に出仕します。以後、来日していた開拓使顧問ケプロン一行の通訳として北海道の長期出張すべてに同行しています。有名な「ケプロン報文」などの翻訳なども、湯地の果たした役割と功績は大きいものがあります。

湯地は、ケプロン帰国後、七重開墾場の経営にあたり洋式農業の普及に努めます。その後、北海道三県時代の根室県令、北海道庁理事官(副知事相当)などを務めています。また晩年には、栗山で農場経営を続けていました。

- ◆ 世界の知識見分を広めた「岩倉使節団」の派遣

<1871 年(明治 4 年)11 月 12 日～1873 年(明治 6 年)9 月 13 日>

米国・ヨーロッパ各国(12 カ国)へ 1 年 10 ヶ月。岩倉具視(46 歳)他 107 名派遣。

1864(元治元年)函館から密出国、米国留学していた新島襄(28 歳)が通訳として同行します。

2、明治政府の開拓使設置—北海道の近代化へのステップ

本格的な北海道近代化の歴史は、1869年(明治2年)7月、開拓使設置にはじまります。

(同年8月蝦夷地を北海道と改称します。)

明治政府が、蝦夷地開拓を急務とした理由としては、次のことがあげられています。

- ① ロシアの南下政策に対する備え
- ② 各藩の武士を北海道開拓に向ける「士族移民」政策
- ③ 欧米列強に対する富国強兵の資源確保など

●初代開拓使長官 鍋島 直正(1814～1871)

江戸末期佐賀藩主。藩政改革を推進、洋式兵備を採用して 強力な軍備を整えます。明治新政府議定などを務め、初代開拓使長官(明2,7,13～8,25)となります。

●第2代開拓使長官 東久世通禧(1833～1912)

幕末明治の攘夷派の公家・政治家。第2代開拓使長官(明2,8,25～明4,10,15)を務め、函館開拓使出張所・銭函仮役所を設置します。この間、初代判官島義勇(明2,7,22～明3,3,2)の本府建設着手、次いで第2代判官岩村通俊の先駆的なインフラ整備、京都を模した札幌建設が進められます。明4,10～明7,8は長官不在により岩村通俊が長官を代行執務しています。

<岩村通俊は、後に1874年(明19)北海道庁初代長官に就任します。>

●第3代開拓使長官 黒田 清隆(1840-1900)

黒田清隆は、1871年(明4)10月 開拓次官、1874年(明7)8月に第3代開拓使長官となります。そして、開拓使廃止直前の1882年(明15)1月まで、本道行政の直接の責任者として活躍します。黒田は北海道開拓の基礎を築いた最大の功労者といえます。

●第4代開拓使長官 西郷 従道(1843-1902)

幕末明治の軍人、政治家。西郷隆盛の弟。陸軍中將、のち海相・内相を務め、晩年は元帥。

<最後の第4代開拓使長官 西郷従道は、明15,1,11～2,8の短期間で開拓使廃止となります。>

3、北海道開拓の基礎を築いたホーレス・ケプロンと黒田清隆の功績



ホーレス・ケプロンの像（背面の碑文）

左側の像 [大通公園西十丁目]

ホーレス・ケプロンは、アメリカ合衆国の人。明治四年わが国政府の招きに応じ、合衆国農務長官の要職を辞して、開拓使教師頭取兼顧問となり北海道開拓の大業に参画した。すなわち、多くの外国人技師を指導して本道の実情をきわめ、卓越した識見と豊かな経験に基づいて、北海道開拓の基本方策を進言し、開拓長官をたすけて、その実現に努めた。その勲業まことに偉大である。

ここに、北海道百年を迎えるにあたり、その偉業を回顧し、功績を永く後代に伝えるため、この像を建立する。

昭和四十二年十月

北海道開拓功労者顕彰像建立期成会

会長 廣瀬 経一

黒田 清隆の像（背面の碑文）

右側の像 [大通公園西十丁目]

黒田清隆は鹿児島県の人。明治三年開拓次官、のち開拓長官に任ぜられ北海道開拓の大任にあたった。清隆はその性、明察果断にして、開拓の知識を先進国に学ぶ必要を痛感し自ら海外におもむき、知見を広めるとともに、ホーレス・ケプロンをはじめ、多数の外国人技師を招き、その進言を入れ着々開拓の巨歩を進めた。

北海道開発の基礎は、まさに清隆の卓見により確立したものと云ふべく、その勲業まことに偉大である。

ここに北海道百年を迎えるにあたり、その偉業を回顧し、功績を永く後代に伝えるため、この像を建立する。

昭和四十二年十月

北海道開拓功労者顕彰像建立期成会

会長 廣瀬 経一

1871年(明治4年)1月、開拓次官黒田清隆(当時31歳)は、留学生7名とともに渡米<2月12日~6月7日>、森有礼(当時30歳・駐米公使)とともにグラント大統領(当時49歳)に開拓使顧問の招聘を依頼、米国農務省長官ホーレス・ケプロン(1804-1885 当時67歳)の顧問契約を成立させます。(黒田はこの間、英・仏・蘭を経て露に至り、帰路米国で農業機械等を購入しています。)

ケプロンをはじめとする合計78人の外国人(そのうちアメリカ人48人~50人)を招いて北海道開拓に欧米の先進技術を導入したことは黒田の高い識見によるものでした。こうして北海道の近代化は、欧米の外国人指導者の先進技術によって進められていきました。これは、本州と違う北海道開拓・近代化の特色といえます。 ■参考資料■(9頁)「お雇い外国人概説」

ケプロン一行は、1871年(明4)8月1日サンフランシスコ出発—8月25日横浜港に到着します。

開拓使顧問のホーレス・ケプロン、当時67歳<~1875年(明治8)5月23日帰国>、
秘書のステュアート・エルドリッジ、当時28歳<~1874年(明治7)10月31日帰国>、
科学技術師のトーマス・アンチセル、当時54歳<~1874年(明治7)3月31日故国>、
土木技師のA・G・ワーフィールド、当時27歳<~1872年(明治5)11月8日帰国>。

ケプロンは、アンチセル、ワーフィールドの開拓予備調査とケプロン自身の3回にわたる道内各地の長期に亘る視察・調査を通して『ケプロン報告書』(①明治4年(1871)11月、②明治6年(1873)11月、③明治8年(1875)3月)をまとめています。3年9カ月滞在の後、さらに離日に際して、開拓使に提出した『報文要略』は、その後の北海道開拓の重要な指針となります。

4、ケプロン山脈 ~ マサチューセッツ人脈のアメリカ人指導者たち

ケプロン<年俸10,000ドル>は来日に際し、工学・地質・鉱学関係担当の技師として合衆国農務省に勤務していたアンチセル<年俸4,000ドル>、測量・土木関係担当の技師としてバルチモア・オハイオ鉄道に勤務していたワーフィールド<年俸4,000ドル>、それに書記兼医師としてジョウジタウン医科大学解剖学助手・合衆国農務省図書館司書をしていたエルドリッジ<年俸4,000ドル>という優秀なスタッフを同行したのでした。

ケプロン在任中のお雇い外国人の大半は、ケプロンの推薦・承認のもとに採用されたこともあり、多くのアメリカ人技術者が中心となっています。次のような人々がよく知られています。

●地質・測量・鉱山開発のベンジャミン・S・ライマン<年俸7,000ドル>(1835-1920)<1873・明6、1、18来日~1880・明13、12、22離日・滞在6年半>。

- 助手のヘンリー・S・マンロー(1872・明 5, 11 来日～1875・明 8, 2, 10)、後コロンビア大学学部長。
- 農業・牧畜のルイス・ベーマー(1843-1896) <1872・明 5 来日～1876・明 9, 5 来道—リンゴ生育指導～1882・明 15, 3 離道、12 年間横浜でベーマー商会、ドイツで療養-1896, 7, 29 死去、53 歳>
- オハイオ州の牧畜酪農家エドウィン・ダン(1848-1931) <1873・明 6, 7 来日・25 歳～明 9, 6 来札—明 15, 12 離札～1931・昭 6, 5, 15 東京自宅死去、82 歳>。 1876 年(明治 9 年)6 月に、エドウィン・ダンは、園芸担当のベーマーと共に札幌官園に転勤し、直ちに真駒内牧牛場の建設に着手、搾乳場・乳製品加工場・用水路など牧場の施設を整備していきます。

◆ケプロン帰国後、札幌農学校関係では、いわば「クラーク人脈」の 10 人の外国人教師を迎えます。ほとんどが、アメリカマサチューセッツ州出身者でした。

- ① ウィリアム・S・クラーク 初代教頭。 <年俸 7, 200 ドル> (1826-1886) <1876・明 9, 7, 31 来札・当時 50 歳～1877・明 10, 4, 16 離札・滞在 8 ヶ月 16 日>。 農学・化学・英語担当。
- ② ウィリアム・ホイラー 第 2 代教頭。 <年俸 3, 000 ドル> (1851-1932) <1876・明 9, 7, 31 来札・当時 24 歳～1879・明 12, 12 帰国・滞在 3 年半>。
土木工学・数学・英語担当、時計台・モデルバーン・豊平橋などを設計。
- ③ デイヴィッド・P・ペンハロー 第 3 代教頭。 <年俸 2, 500 ドル> (1851-1932) <1876・明 9, 7, 31 来札・当時 22 歳～1880・明 13, 8・滞在 4 年間>。
化学・植物農学・数学・英語担当。石鹼・ローソク・マッチ・コークス・魚油など製造実験。
- ④ ウィリアム・P・ブルックス 第 4 代教頭。 <年俸 2, 500 ドル> (1851-1938) <1877・明 10, 2 来日・当時 25 歳～1888・明 21・滞在 10 年 7 ヶ月>。
植物農学担当・官園監督、丘珠タマネギ・トウモロコシ・カボチャ・トマト・キャベツ栽培。
- ⑤ ジョン・C・カッター (1851-1909) <1878・明 11, 9 来日・当時 27 歳～1887・明 20, 1・滞在 8 年 4 ヶ月。>
生理学・解剖学・英文学担当。他に獣医学・水産学・動物学。病院医術顧問で札幌の病院施設の充実・学校の身体検査の創始などに努める。死後 1910 年、遺言により札幌市に寄付された 500 ドルをもとに 1938 年・昭 13 に大通西 5 丁目の「聖恩碑」四隅にカッターさんの水飲み場が設置されています。
- ⑥ セシル・H・ピーボディー(1878・明 11, 12・当時 23 歳～1881・明 14, 7)。
数学・土木担当。

⑦ ジェームス・サマーズ(1880・明 13、6・当時 51 歳～1882・明 15、6)。 (イギリス人)
英語担当。

⑧ ホーレス・E・ストックブリッジ(1885・明 18、5・27 歳 ～1889・明 22、1)。
化学・地質学担当。

⑨ ミルトン・ヘイト(1888・明 21、1 32 歳～1892・明 25・8)。 (カナダ人)
物理・数学・英文学担当。

⑩ アーサー・A・ブリガム(1888・明 21、1・当時 32 歳～1893・明 26、11)。
農学担当。

これら札幌農学校初期の米国マサチューセッツ州出身の教師は、総じて勤勉で献身的に職務以外の仕事にも非常に熱心に取り組み、ほんとうに北海道開拓期の立派な指導者でした。また、そのほかのアメリカ人技術者として、次のような人が招かれています。

●茅沼・幌内炭鉱のアーネスト・ゴージョー(1879・明 12、2～1880・明 13、3)と

ジョセフ・ドーズ (1879・明 12、3 月～同年 9 月) の 2 名来日。

●手宮～幌内鉄道敷設・土木顧問のジョセフ・クロフォード(1878・明 11～1881・明 14、8、31)、

●水産加工・魚肉缶詰、鮭鱒孵化技術のユーハム・S・トリート(1877・明 10、8～1879・明 12、2、7)
トレスコット・スエット(1877・明 10、9～1879・明 12、1、7)

開拓使の「お雇い外国人」合計 78 名中 ケプロンを筆頭に 48 名がアメリカ人でした。

<補注>

■ケプロンは、1871 年(明治 4 年)9 月、早速、東京に農事試験場「官園」3ヶ所(赤坂、青山、麻布)を設置して、アメリカから輸入した動植物を管理し、同時に北海道の七重・札幌にも官園を設置します。札幌では、札幌本庁敷地北側に 3600 坪(後に 40 万坪に拡大)の「御手作場」(農事試験場)を設け、種々の農作物を栽培します。「葡萄園」「ホップ園」「果樹園」なども設けられ、その後、1876 年(明治 9 年)には、この官園のうち、30 万坪が札幌農学校農場に移管されます。

開拓使は、ケプロンの献策により、札幌市内大通～北 1 条・東 1 丁目～東 4 丁目の地域を工業ゾーンとして、多くの「官営工場」を建設します。1876 年(明治 9 年)現在のサッポロビールの原点「開拓使麦酒醸造所」もこの地に誕生します。

■ケプロンの進言を受けて、1872 年(明治 5 年)3 月 開拓使「仮学校」が東京芝増上寺境内に開校します。1875 年(明治 8 年)9 月札幌に移転して「札幌学校」とし、翌 1876 年(明治 9 年)8 月 14 日 クラーク博士一行を迎えて「札幌農学校」として開校します。

■参考資料■ お雇い外国人概説

ペリー来航(1853~54)のよってもたらされた開港を契機として、明治政府・府県や民間においても、急速な近代化を迫られます。そのために、先進諸外国より多くの指導者・技術者を招聘し、「お雇い外国人」として雇用することとなります。

全国的な外国人雇用は、日本の政治・法制・経済・産業・教育・芸術の広範な分野にわたり、その職務も、雇用機関の顧問から、教師・技師・職工・水夫・火夫・農牧夫・雑務のいたるまで、実に多彩です。この全国的なお雇い外国人の実態を把握するのは、資料的に難しいのですが、ユネスコ東アジア文化研究センター「資料御雇外国人」には、1868年(明元)～1889年(明22)の間の官・公・私雇合計 2,299人 という記録があります。

国籍別人数は次の通りです。

イギリス人	928人	オランダ人	87人	スウェーデン人	9人
アメリカ人	374人	オーストリア人	21人	ポルトガル人	6人
フランス人	259人	デンマーク人	21人	その他	24人
中国人	253人	イタリア人	18人	不明	80人
ドイツ人	175人	ロシア人	16人	多国籍	28人

さて、北海道の開拓使「お雇い外国人」は、1871年(明4)～1881年(明14)の10年余の短期間に、78人を雇用しています。これは、ロシアの南下政策に危機感を抱いた明治政府が、北海道開拓を急務としたことによります。開拓使雇用 78人の職務・国籍別人数は次の通りです。

開 拓 使 の お 雇 い 外 国 人

	アメリカ	中 国	ロシ ア	イギリス	ドイ ツ	オランダ	フランス	計
開拓顧問	1							1
学校教師	11		1	2		2	1	17
汽船乗組員	9				3			12
鉄道建設	8							8
農業・牧畜	5							5
測量・土木	3					1		4
建 築			4					4
地質・鉱物	3							3
採 鉱	2			1				3
革 鞣	1	2						3
機械・工作	2							2
織詰製造	2							2
裁 縫					1			1
医 師	1							1
外国船取締				1				1
通 訳		1						1
農 夫		10						10
計	48	13	5	4	4	3	1	78

(註) 職種は当初契約によった。

<この、開拓使雇用「お雇い外国人」については、本稿で詳述しています。>